

令和5年度第2回佐伯市総合教育会議議事要旨

- 1 日 時 令和5年11月6日（月）14時～15時50分
- 2 場 所 さいき城山桜ホール 小ホール
- 3 出席者 (会議の構成員)
- | | |
|------------|-------------|
| 佐伯市長 田中 利明 | 教育長 宗岡 功 |
| 教育委員 平井 國政 | 教育委員 小寺 香里 |
| 教育委員 藤崎 郁 | 教育委員 山口 清一郎 |
- (教育委員会)
- 教育部長 久々宮 克也
- (事務局)
- | | |
|-------------|--------------|
| 総合政策部長 植田 実 | 政策企画課長 末永 健二 |
| 総括主幹 田村 英朝 | 主任 山本 愛子 |
| 副主幹 出納 達哉 | |

4 要旨

| 次第1 市長あいさつ | |
|------------|---|
| 市長 | <p>(開始 14時)</p> <p>少し雨が降り晩秋の潤いを感じる最中であるが、第16回の総合教育会議を開催する。本日はこれまでの総合教育会議で一番楽しみである。グローバル人材の育成ということで、廣津留すみれ氏を講師としてお招きした。</p> <p>総合教育会議は平成27年度から過去16回さまざまなテーマを設けて開催しているが、本市の最上位計画である総合計画において、人が学び、人が活き、人が育つ教育の創生を推進していくと同時に、「人と自然が共生する持続可能なまちづくり」さいきオーガニックシティの実現を目指し、経済・社会・環境の3つの側面に配慮した取組を行っている。人口減少や少子高齢化など様々な課題を見ながら、これからの時代は量から質の時代であり、これまでの大量消費大量生産という経済システムから脱却して、本物の時代、本物の人を作っていく使命を課されているという気がしてならない。世界は今なお紛争が続いているが、我々の目指す世界は果たしてそのような人と人が争う時代を目指しているのか、1人の支配者が世界を牛耳るような時代ではなく、平和な世界で自分の持つ能力を發揮できる時代を作らなければならないと思っている。</p> <p>今日は、世界的なヴァイオリニストの廣津留すみれさんに御講演いただくということで、ハーバード大学からジュリアード音楽院に進まれ、テレビのコメンテーターもされておられる。昨日のSAIKI MEETS CLASSICは約500名お集まりいただき盛況だったとお聞きしているが、そういった音楽の世界での経験やグローバル化に対してのお考えをぜひ披瀝していただきながら会議を進めていきたいと思う。</p> |

＜「次代を担うグローバル人材の育成」について講演＞

ご紹介ありがとうございます。

皆さんこんにちは。廣津留すみれと申します。今日は短い時間ですけれども、佐伯市の総合教育会議にお呼びいただき、本当にありがとうございます。

昨日、ちょうど隣の大ホールでコンサートを終えたばかりでして、このホールは新しく初めて来たんですけれども、大変響きもよくてとても気持ちよく演奏させていただきました。

今回は次代を担うグローバル人材の育成ということで、こういう教育はこうあるべきとか、こうしなきゃいけないっていう話はおこがましくて言えないんですけれども、アメリカで学んだ経験を基に、私はこういう生活をしていましたというお話などを講演させていただければと思います。

ご紹介いただいたんですけれども、私は大分市に生まれまして、小中高と公立の地元の学校に行っておりました。

そのあとアメリカのハーバード大学に4年間学士課程で行きまして、そのあとニューヨークにあるジュリアード音楽院という音楽、芸術に特化した学校で修士課程2年間を終了しまして、そのあとニューヨークで起業をしたりして活動していたんですけど、コロナが起きてしまったので私としては本当に3ヶ月くらい日本に避難するくらいのつもりだったんですけど、かれこれ3年あまり経ちまして、今は東京を拠点に大分に行ったり秋田に行ったりいろいろなところに回りながら活動しております。

今はほとんど70%ぐらいは演奏活動がメインの仕事ですけれども、秋田にある国際教養大学で週に3コマ授業を持ってまして、成蹊大学も持っていますし、今年は内閣の教育未来創造会議という会議の構成員をさせていただいたり、大分市の教育委員もしていますので、月1で大分には帰ってきて教育委員会の定例会などに参加しております。それと金曜日はコメンテーターを務めたりなどなど、いろいろな仕事をしているんですけれども、簡単に私の経歴をお話しします。

1993年生まれで、小学校3年生のときに初めて九州の音楽コンクールに参加して、そこで初めて3歳2歳の終わりくらいからヴァイオリンを弾いていたんですけれども、そこで同世代の音楽をやっている人と、コンクールをする機会がありまして、もしかしたら自分は音楽を目指す可能性があるのかもしれないっていうくらいの自覚が芽生えたのがそれくらいのタイミングでした。

そのあと高校に入学しましたが、2009年頃高校1年生の時に初めてパスポートを作りまして、イタリアのシチリア島というところでコンクールを受けまして、グランプリをいただいたご縁もあって、高校2年生のときに初めてアメリカの地に足を踏み入れたんですけど、私としては小中高とず

っと学業とヴァイオリンの両立をしてきたので、大学も両立したいと思っていたところに、ハーバード大学の見学をさせてもらったところ、大学生の皆さんが課外活動も学業も、本当に全力で取り組む人が多かったので、行きたいけども入れないだろうなと思いながら帰国して入試にチャレンジするのを決意したんですけれども、そこで運よく入学しまして、そのあとはハーバードに4年間ボストンに4年間とニューヨークに4年間いて、日本に戻ってきたという感じです。

本日は大きく分けて4つのトピックについてお話しようと思いますが、グローバルと言っても何がグローバルなのかというところがあると思うので、私がどのような経験を大学でしてきたかというのを写真を含めてお伝えしたいと思うのと、世界という舞台でどういう人材が私の周りで活躍しているのかというお話と、可能性を広げる教育って自分が大学でも教えている中でどのような計画なのかというお話と、**STEAM**教育の話などを含めてお話したいと思います。

まずはイメージを掴んでいただこうと思ひまして、写真をたくさん用意しました。こちらは私が大学1年生の時に使っていた食堂なんですけれども、ハーバード大学はマサチューセッツ州のケンブリッジ市というところにありまして、ボストンの隣町なんですけれども、1年に1,600人が入学します。これは学部とかは関係なく、日本だと高校3年生ぐらいまでには何学部に入るとか決めなきゃいけないと思うんですけど、アメリカの場合はすごく自由で学部はみんな同じ学部なので、1年生全員がこの食堂を使うことになっていて、三食ビュフェスタイルで、ハリー・ポッターのようで天井も高くシャンデリアが下がっていて、偉い人の肖像画と銅像が並んでいるっていう雰囲気なんですけれども、学校側の意図としては、1年生の時にとにかく友達を沢山作っておきなさいというメッセージだったのかなと思いました。

学長先生の入学式のメッセージも、今までは高校でも成績が一位でみんな優秀とされてきた学生だけでも、ここに来たらみんな優秀だから、みんな一旦振り出しに戻りましょう。みんな同じ人間なので、ただ、これから恐らく世界でリーダーとして人を率いていく人材として活動していかなければいけないので、今ここでいろいろな人と知り合って、いろいろなバックグラウンドの人と仲良くするというのを学んで、それをリーダーシップに活かして欲しいというようなメッセージがありましたので、1年生の時に本当にたくさんの人と触れ合うことができたのは財産だったなと思います。

この写真は食堂の手前に見えているご飯ありますが、何故かお盆が緑でドリンクは青であり食欲が進みそうなご飯ではないんですけど、同じところでみんなが一緒にご飯を食べるとというのが今考えるとすごく大事なことだったなと思います。

1年生の時は授業の建物に近いところに住んで、その食堂でご飯を食べるんですけど、2年生から4年生になると大きめの寮に移動します。ここが私の寮ですけど、400人が一つの寮に住んでいて、食堂も寮の中にあるので、その400人が先輩後輩含めて皆さん仲良くなるという感じです。寮対抗のスポーツ試合などもあるので、そこで学生同士の団結も高まります。

ただ、私が初めてアメリカに在學生によるツアーをしてもらった時に感じたんですけど、みんな普通の学生で、大分にいる時はハーバード生ってどんなすごい超人がたくさんいるんだと思っていたんですけど、実際に足を踏み入れてみるとみんな普通の学生で、本当にみんな人間なんだなというのが一番の印象でした。

自分でも挑戦できるんじゃないかって思ったのは、実際にその学生さんと触れ合って、もちろんみんな優秀な課外活動ですとか学業の成績はあるけど、普通の学生なので頑張ったら入れるんじゃないかなと思ったのがすごく大きなきっかけです。

実際に入った後も2年生から入る寮が決まる組分けセレモニーがあるんですけど、皆さん朝から学校のだ真ん中に集結して、うちの寮が一番だっというのを叫んでいるセレモニーなんですけど、学生生活自体はすごく課外活動も楽しくて、ハロウィンになると、かぼちゃをいかに上手に掘れるかを競い合ったりとか、私の寮はヘラジカがマスコットだったんですけど、そういうのがみんなできたりとか。

あとは学生による自治の団体がたくさんありまして、日本で言うサークルみたいなものなんですけれども、例えば私がプロデュースしていたオペラがあったんですけども、学生時代から企業とかにファンド（投資）のお願いに行ったりとか、すべて予算も自分たちでやらなければならないので、チケットが売れなければそれは自分達の負債になってしまうので、その辺も全部学校がお世話するのではなくて、学生たちが自分たちでリーダーシップをとって、すべてのプロジェクトを作成させるようにできていました。

もちろん学校には基金があり、ハーバードは寄付金の額も世界で一番と言われているくらいで、生徒に出してもらえる補助金も多いんですけども、それもきちんと申請しないといけないし、どういう結果が出たかというのを交渉し、社会に出たときのように学生が1からやらなければいけないというのはかなり貴重な経験で、学生時代から課外活動においても鍛えられていたと感じました。

これは卒業式で、私はハーバードの校歌を壇上で演奏したこともあって、この上からの写真を撮ることができたんですけども、卒業式というのは1日で終わるわけではなく、卒業式週間のようなものがありまして、1週間ゲストの卒業生の方とか有名な方とか、私の時はスティーブン・ス

ピルバーグ監督がゲストでお話しにいらっしゃって、自分の人生の脚本は自分で継ぐんだよというお話をしてくれました。

ハーバードでの1日ですが、私はとても夜型で朝が苦手だったので9時ぐらいに起きていました。

この写真はよくある寮のお部屋で、ベッドがあって、机があって、タンスがあってみたいなシンプルなお部屋です。

この大きな講堂が一番大きい教室で、大人数の授業はこういう場でやるんですけども、大体のクラスはこのように本当に少人数の授業になり、最大で15人から20人ぐらいの少人数のセクションがあって、教授が来ることもあれば大体の時は大学院生がアシスタントとして率いることが多いんですけども、少人数の授業になると全員が発言をしなければいけないので、発言をしないとそこにいるってみなされないというのがアメリカの教育の厳しいところで、私は最初慣れるのに苦労しました。

高校まで大分にいたので、授業といえば言われたことを吸収して、板書を写してそれを自分の中で吸収するというのが普通だと自分の中で思っていたので、少人数の授業であなたはどう思うんですかとか、論文を読んできて自分なりにまとめてくださいと言われるのが、この前まで大分の高校生だったので、特に大学1年生の時は本当に慣れるのが大変でした。

右上の写真は、とても有名なチェリストのヨーヨー・マさんという方ですけども、大学の近くに住んでいて、時々遊びに来てはマスタークラスをしてくださったり、大きな講義の時に後ろの方に座って授業を見学していたりっていうとても気さくな方で、そういう各分野のレジェンドのような方が授業に来てくださったり、とても気さくな皆さんが多かったです。

夜、図書館に行って、この写真の図書館は24時間開いていたので何時でも行くことができ、私にとっては結構トラウマな図書館なんですけれども、私は大体夜に宿題を始めて、もちろん周りは全員というか90%ぐらいは母国語が英語の人ばかりなので、その人たちに例えばエッセイで読むのも書くのも追いつこうと思うと人一倍の努力が必要だなと思って、何度もこの図書館で朝を迎えることができました。

でも毎日課題漬けというか、例えば先ほどの授業でいうと、水曜日に大きい授業があったら月金はセクションだったりするので、少人数の授業に備えるために論文を読み込まないといけなかったりとか、宿題も出るのもそれを合わせるとすごくタフな生活でした。

アメリカの授業は大学で1学期にとれる授業の数が四つほどで、日本だと10種類の授業を選択したりすると思うんですけど、アメリカの場合四つ授業を選択して一つが週3月水金とかですので、1週間に1度だとちょっと忘れがちな部分も週3回ある分かなり密度の濃い授業が行われておりました。3時ぐらいに寝るという生活をしていたんですけども、今振り返って、私は海外に行くのが必ずしもベストなチョイスっていうのを言っ

ているわけではないんですけれども、必ず確実に私の中で、大分にいたときよりも視野が広がったなと思うことはたくさんあるので、それが今どのように役に立っているかをお話しようと思います。

まず同級生ですね、1年生の時にたくさん友達を作ってねと言われてくらい、同級生から学ぶことがたくさんありました。

大体皆さん図書館に行く人もいれば、食堂で宿題を教えているんですけども、1つの机に4人座っていてみんなでご飯食べたり宿題をしている中で、学部によってキャンパスが分かれていたりしないので、各分野のトップの学生さんたちからいろいろな情報が入ってきます。

例えば、ここで私が音楽の作曲の課題をしていたら、こちらでは科学の実験のラボのペーパーをまとめていたり、ここでは文学をやっていたり、ここではブラックホールについて研究していたりっていう人たちが同じ場所にいるという、ミックスされた環境が当時の私は普通だと思っていたんですけども、だんだん大人になってくると、自分の周りにいる人の業界ってすごく限られてくるなと思うので、その時にこういうこの業界だと同じ課題を見てもこういう考え方をするんだなっていうのがわかったというのはすごく貴重な財産でした。

今でもなるべく積極的に異分野の人と交流しようとはするんですけども、学生で自然にそういう分野のことが学べる状況っていうのはすごく貴重だったなと思います。皆さん本当に自分が積み上げてきたものに対しての自信がすごくあるので、それが次に繋がるんですけども、皆さん自分の分野にすごく自信があって、人のことをうらやましいなんて少しも思わないというのが一つと、例えば、科学の論文がサイエンスに掲載されることになったよって言ったら、周りの人はなんであの人なのかなるわけじゃなくて、祝福される空気になるっていうのがすごく健康的というか、皆さんのモチベーションが上がるような雰囲気が常にできていました。

自分が何かを積み上げてきた経験があると、他人がそこまでの域に達しているということがわかったときに、どれくらいの努力をしてきたのかというのを共感することができるので、そこでお互いのリスペクトが生まれて、お互いに敬意をもって接することができるっていうのが大学の同級生を見ていると学ぶことが多かったです。

ハーバードだからこそトップの人が集まっているというのはあるんですけども、分野の人と関わるっていうのがいかに大事かというのをすごく学びました。あとはいかに人脈というか、いろいろな多様性のある人と関われるかということが一番だったのかなと思います。

今振り返ると、世界のどんな国に行っても友達がいますし、やりたいプロジェクトが、例えば、環境問題について気候変動について、何かアクションを起こしたいと思ったら、世界中にいろいろな分野のトップの人たちがネットワークとしてあるので、仲間を集めることもできるし、専門的な

知識を借りることもできるというのはすごく強いポイントでした。

私の同級生で、どういう人がいるのかというのはよく聞かれるんですけども、いい大学に行くとコンサルや金融や政府系に行ったりなどのイメージがあるかもしれないですけども、私の周りは結構多様で、サンフランシスコに行った友達は大体エンジニアになっていて、この人はリンクドインという IT 企業でエンジニアをしている人だったりとか、彼は大学時代からずっとコードを書いているようなタイプだったんですけど。

あとニューヨークに行った友達は、ニューヨークのコメディ対談番組の脚本家をやっている方がいたりとか、でもそれもお笑いの世界も日本とアメリカでまた文化が違いますけど、凄く頭の回転が早かったり、知的なギャグを考えたりしなきゃいけないので、結構何かコアなところなんですけれどもそういう人がいたり。

元ホワイトハウスで働いていた、またワシントン DC の政府系に行った人がいたり、あとはパリに自身が劇団やっていたこともあって、オペラのプロデュースとかを大学で経験していたから、その経験を生かして劇団を主催している人だったりとか、ブラジルで史上最年少の連邦議員になった方とかもいらっしゃるんですけど、その人は私が 10 年前からサマーインジャパンという教育プログラムをやっていて、毎年 10 人くらいのハーバード生を呼んでやっているんですけども、彼女は大学 3 年生くらいの時に大分市に来て、大分や全国の小中高生を教えてくださいましたんですけども、そのあとブラジルに帰って何とすぐ連邦議員になってしまったという方もいらっしゃいました。

今までのこの職業だったら堅実だよねというものにとらわれない本当に多様な職種について同級生がいるので、いい意味であまりプレッシャーがないというか、こういう業界に行かないと駄目なんだよっていうのがなくて、みんな違う職種についても皆違って皆いい状態で、ミュージシャンになる同級生ってハーバードの時はあまりなかったんですけど、自分のパッションを追い求めることって悪いことじゃないんだとか、こういう職業に就かなきゃいけないっていうのは別にないんだなっていうのが、周りを見ていてそういう壁が破られる感覚があったので、それで自分も自分の熱がある分野をずっと突き詰めてくれたのかなというところはあります。

タイムマネジメント術とかも本当細かいところですけども、周りを見ていると本当に時間の使い方が上手で、私がいつも言っているんですけど、人間の力というのは例えば私の場合は学業もやりたいし、ヴァイオリンをやりたいという両方の軸があったんですが、グローバルっていう言葉は余りにも曖昧というか大きすぎるんですけど、世界を見渡してみると、本当に自分の限界の上の天井をどんどん押し上げる人ばかりで、一つのことをやろうと思ったら、それだけに集中して 100%をやろうと思うのが普通だと思うんですけど、例えば高校とか大学受験の前になったら、部活と

かをやめて受験にフォーカスするとかっていうのがあると思うんですけど、周りにも影響されたなと私が思うのは、それぞれを100%で200%ぐらい頑張りたいと思っていたら、自分が今まで100%しかないと思っていた力ってどんどんどんどん上がっていくもので、これは特に小・中学生とかそのくらいの幼少期というか、まだ義務教育段階の時に、自分の可能性を限定することなくどんどんどんどん押し上げることによって、一つにそのすべてのパワーを注力するよりも、複数やりたいことにフォーカスした方がかなり効率も上がって行って、結果的に自分のやりたいことだったり、学業と一緒に両立ができたとか、幾ら自分のやりたいことがあっても交換できるようになっていく。

これはもう慣れというか、本当に反復するしかないんだと思うんですけど、それはかなり実感しました。周りを見ていて、みんなしっかりとやるべきことをやりながら自分の好きなことをやるっていうのがかなり目立ちました。あとはこれは先ほど少人数授業のところでお話したところの補足なんですけれども、日本の大学の授業は出席点という点数があると思うんですけど、ハーバード大学では出席点っていうのは全然使わなくて、授業で発言をしてやっとならしたことになるシステムなので、発言しないっていうことは存在しないのと同じとみなされるんです。

これは本当に私が一番苦勞したところだったんですけど、例えば10人くらいの少人数のセクションだったりすると、もちろん自分と全く違う意見を言う人もいるんですけども、そこで臆せず自分の意見を言うということと、例えば反対の意見を言われた時に、それを個人的にあの人もしかして私のこと嫌いなのかもしれないって思うのではなくて、ここの議論をみんなが改善しようとしているから、そういう反対意見を言うんだっていうのをすぐに解釈にするという力が、特にアメリカの教育方法はもう小さい頃からそれに慣れているので、すごく議論が得意、得意というかあまり個人攻撃と思わないで、どんどんどんどん次の意見を出せる空気になっているっていうのが私にとっては新しい学びでした。

建設的批判というのが個人攻撃と全然違って、とにかくその場を良くするためにどんどん自分の意見をしっかり言うということですね。これは私も舞台上でもトークたくさんしますし大学でも教えていますが、そういう場でもやっぱり自分の意見をしっかり持っているっていうのはすごく今でも役に立っていますし、自分は高校までは受け身で、先生の言ったことを受け入れるスタイルだったんですけど、できれば子供の時から自分の意見を言うことが間違っていないっていうのと、全く違う意見でも言っているんだよっていうのを学生たちにわかってもらう環境づくりってすごく大切だっていうのは思いました。

求められる人材もこれは基本の基なんですけれども、実際に海外どの国に行っても一番大切だと思うのは、自分の名前をちゃんと名乗る。

これはオンラインでも対面でも変わらないと思うんですけども、一緒に来た人がいたらその人をちゃんと紹介するとか、日本だけでなく皆さん人間なので、自分の名前をちゃんと言ってくれるっていうのはすごく大事にしてくれているんだなって思うことになるので、ちゃんと名前を名乗る、目を見る、これも海外は特に目を見ながら話すので、例えば日本に帰ってきて名刺交換する時に、名刺を見るんじゃなくてちゃんと目を見ているかとか、その辺は小さい頃から鍛えておくとか、しっかりとしたマナーをつけておくだけで、相手の信頼っていうのは得やすくなるというがあるので、それは世界を舞台に活動しようとしたら、とにかく最初に必要なことかなと思います。

握手とか笑顔とか目線とかも本当に同じなことです。

あとはグローバルなんていうとマナーというのは大げさなんですけれども、よくコミュニケーション上手だねっていうお話があったりすると思うんですけど、話が上手いわけじゃなくて、いろいろな話題に対応できるかというところが結構大きいと思います。

私も海外に行って寮生活になってルームメイトがたくさんいる中で、例えば私が大学に行った時は、ちょうどオバマ大統領の再選のときで2012年ぐらいだったんですけど、みんなちょうど18歳で選挙権を持ったばかりで、アメリカの選挙ってこんな盛り上がるのかっていうくらいみんなずっと選挙速報を観ているし、オバマさんの当選が決まった時はもう本当に大学の中でいろんなところ、いろんな寮の部屋から叫び声が聞こえて、歓喜のダンスをしている人達もいたりしたくらいでした。

政治の事について、例えば日本の政治ってこうなだけで、アメリカって違うよねとか、自分の出自とか自分が来たところのお話について語れるかとか、あとは自分の好きなこととか、自分が熱心に研究していることについてどれくらい語れるかも相手は結構見ているというのはすごく感じました。それが何かブラックホールの研究でブラックホールについて語れっていうわけじゃなくて、それがスポーツでもいいと思いますし、毎日やっているランニングの話でもいいし、映画の話でもいいと思うんですけど、ただただ表面的な話をするだけじゃなくて、一つのことについて掘り下げてお話をできる力というのがあるだけで、相手の見る目も変わるし、相手との信頼関係ができるので、それはすごく大事ななと思います。

あと、これは私がジュリアード音楽院に居た時に、契約書についてのワークショップを弁護士が学校に来てして下さったんですけど、やっぱり音楽家と違って毎回契約書を交わす機会とかも多いんですけど、ちゃんと契約書を読んで、自分に不利なことがあったらちゃんとその契約書の中身を変えて出しましょうっていうのはすごくしっかり教え込まれました。

例えば最近だとブラック校則とかそういう話もありますけれども、何か

これおかしいとか、今の時代に合っていないと思ったら、それをちゃんと自分の力で先生に持っていくとか、学生内で共有して行動を起こすっていうことをしていると、自分の意見が今までの規則だと思っていたものが、何かを提案することで通るっていう経験を1回していると、自分に不利なものも交渉したら違う方向に、いい方向に変わることもあるんだなっていう経験ができると思うのでそれはすごく大事です。

あと、遠慮しない人材と書いてあるんですが、これは私の個人的な経験で、日本から来て1年生2年生の時とか、みんなが話しているのが余りにも英語が早口でわからないことがあって、適当に愛想笑いして会話を流していたんですけど、そうすると友達に、なんですみれちゃんいつも笑っているのって言われて、えっ！て思って凄いだキッとしました。

ただ毎回笑っている人だと全然話を聞いてなくて、ただ話を合わせている人だと思われていたみたいで、自分では皆さんの意見に同意しているよっていう、仲良くなりたいサインだったんですけど、向こうからすると何か私が全然本音を話してくれない人と思われていたようで、これは仲の良い友達だから言ってくれたんですけど、逆に面白いところで笑うとかはいいけど、シリアスな場面ではシリアスな顔するとか、ここちょっと違うんじゃないと思ったらちゃんと言うとか、本音を言ってくれる人じゃないと友達としても、ビジネスパートナーとしても信頼できないっていうのを言われて、結構ドキとしたので、海外に行ってもどこに行っても、自分が言語が苦手でも愛想払いをしたりするよりも、ちゃんと本音で話すことが本当に大事なんだなということ、遠慮する場面ももちろんあっていいですけど、私はこう思うと思ったらとにかくその意見を貫くというのがすごく大事だなと思いました。

あとは多様性ですね。アメリカでも例えばファッションブランドが、他の文化の盗用として訴えられたりとか、ブランドの新しいコンセプトを出したときに、例えばメキシコの刺繍を使いましたってなったときに、メキシコ政府から、それはうちの文化なので使わないでと言われたりとか、そういうインシデントがありました。

なぜ多様性が大事とされているかというのはいろいろな理由がありますが、意思決定する時に、これってマイノリティ側からしたらすごく不都合なブランディングだよなとか、こっちの意見もこっちのマイノリティの人とか、この国籍の人から見たらどう思うんだろうなとかきりがありませんけど、いろいろな視点から物考えるために、例えば役員の中にいろいろな多様性を入れておくことって本当に大事で、例えば、同じ性別だけしかないとか、同じ国籍の人しかない役員会議で決まったことが、他のサイドから見たらどう思われるんだろうっていうのを、ちゃんとプロセスできているかっていうのは今は監視が厳しいので、そのためにも自分では多様性理解していると思っても、いろいろな人にとって多様性を見てきてい

ると思っているけど、毎日毎日これって駄目なんだとか、これって世界ではNGとされているということってたくさんあって、自分でアップデートしていると思っても全然追いつかないので、自分の多様性の理解って本当に足りないんだなと思って過ごさないといけないというのは、日々私も実感しているところで、特に大学生を毎日相手にしていると、18歳の人とかもすごくオープンマインドで話して考え方も違ったりするので、それは常にアップデートしなきゃいけないなと思っています。

可能性を広げる教育ということで、褒め方にはマニュアルはないので、私は褒められて育ったタイプなんですけれども、子供たちが学校現場で過ごしていたら本人たちは思っていないけれども、ここってすごいよねっていうのが気づかない得意分野とかを見つけてあげる。

そうすると、もしかして自分では気づかなかったけど、自分の強みなのかもしれないっていうのがだんだん自分の中でわかってきて、それは性格面も仕事面も日常面とか学業の面とか課外活動が全部そうだと思うんですけども、そこで思わぬスキルとか自分の中では自覚していなかったようなものが仕事になったり、自分が生きる望みになったりとかモチベーションになるっていうことはたくさんあると思うので、「**think outside the box**」型にはめないで考える。これも良い発想だよとか、皆必ずいいところはあるのでそれを褒めてあげる。

あとは、常識は存在しない。私は海外に行って本当に常識とは何だかっていうところに毎回ぶち当たっていたんですけども、寮に入ったらルームメイトに普通に自分の靴下を履かれるし、バスタオルを勝手に使われるし、そしたら何かと正当化した理由をつけて言い返されるというような生活を毎日していたら、日本人的にはこれは絶対駄目だと思っているのが他の面から見たら常識ってないんだなっていうのは実感したので、今日の常識はもうすでに明日には時代遅れになっているなと思うようにして生活しています。

それと、先ほどの発言と重なりますが、セーフスペース、私は大学の授業をする時に必ず言うようにしているんですけども、初回の授業で、この教室はセーフスペースなので何を言っても例えば反対意見だったりとか何か厳しいことを言っても、この教室を出た瞬間にそれはもうみんな忘れるから個人攻撃とかそのあとの喧嘩になったりしないここだけにとどまるので、このスペースの中ではセーフなので、質問でも意見でも何でも言ってくださいというようにしています。

これは授業だけではなく、ここの学校の中ではとかこの教室の中では何を言っても大事大丈夫だから、他の人に言われたりしないんだよっていう環境を作ってあげるだけで、今まで出てこなかった意見とか質問がどんどん出てくるようになるっていうことは授業の中でもかなりあるので、すごく大事なことだと思っています。

あとは外の世界に触れる機会を作る。1つのコミュニティに依存してしまうと、そこで何かが目撃になったり、自分の悪口が言われるようになったりとかしたときに逃げ場がなくなってしまうので、とにかくコミュニティの大きさというよりもコミュニティをいくつか持って、例えば部活があつて授業があつて習い事があるのか、地域のコミュニティがあるのか、オンラインのコミュニティがあるのか、などあると思うんですけど、私も留学フェアとかでお話をすると、質疑応答で学生さんたちが来て自分はすごくゲームが得意なんだけど、そのゲームのよさを自分の教室内ではわかってくれないけど、オンラインだと他のコミュニティとかもあるんだけどどうしたらいいですかという質問を受けると、それはオンラインで褒められたえられるくらいのゲームのスキルがあるんだつたらとてもすごいことなので、教室内での評価を気にすることはなくて、それだけいろんなコミュニティがあるのは素晴らしいことだよなって私はよくお話しています。

STEAM教育の話をしたいんですけども、今までSTEM教育ということで科学技術を学ぶということが大切とされていましたが、芸術を入れてSTEAM教育というのがたくさん言われていますで、私の尊敬するチェリストのヨーヨー・マさんが言うには、コラボレーションとかフレキシビリティそしてイマジネーションとイノベーションを一番育てることができるのは芸術というふうに言っています。人とチームを組んでやる力、あと柔軟性と自分が創造する力とイノベーション、新しいものを作る力をつけるのに芸術はかなり効果的というお話をしていました。

‘Empathy, imagine what someone else is going to do.他の人がどのような境遇で、どういう状況に立たされているのかを創造する力共感力っていうんですかね。合唱とかで人と一緒に協働しなきゃいけないし人の歌い方に合わせて自分の歌い方も変えなきゃいけないし、芸術というのは自分がゼロから新しいものを作ることなので、そういうのを含めてこれからの教育にエンパシーが必要なんじゃないかというふうにヨーヨー・マは言っています。

私がヴァイオリンを続けられた理由とか好きが仕事になったのっていうのは、とにかく好きなことを努力したこと、周りに何でそんなに努力しているのか全く言われぬものすごくラッキーだったなと思うんですけども、やはり日本の外に出て自分の一番の強みって何だろうっていうことをちゃんと発見できたことがすごく大きかったなと思います。

これはまとめになりますが、今日の常識は明日には時代遅れになるんですけども、芸術もそうだし、毎日の教育を通してそういう新しい自分の今までいたボックスの中から出て、新しい考え方を身につけるような環境を作り出すというのが、次世代の人材を育てるにあたって大人の役目なのかと思っています。講演は以上です。

| | |
|---------|---|
| 山口委員 | <p>先ほど廣津留さんからグローバルというか色々なお話を聞く中で、ブラック校則というお話がありましたけど、日本では同調圧力を好む国民性を持っていますよね。</p> <p>なぜかという、今の日本の企業というのはよく言う労働集約型産業が多いがために優秀で均質な人を育てていくと、どちらかという労働集約型に近いそういう人を作っている環境でもそれが今の日本の低成長を招いていますよね。</p> <p>アメリカのカリフォルニアのベイエリアとかシリコンバレーに Google とか apple だとか Facebook だとか、IT・グローバル化に対して、それをベンチャー的に革新していくそういった幅とかを含めて人材を公募して、いま日本はどうしてもそういった産業構造として品質的な労働やそのために学校は同調圧力を求めているので、それだと今から革新的な次の時代に日本という産業も生き残っていかないと、思っていますよね。</p> <p>そのためには、学校教育を変えていかなきゃいけない。学校に対してイノベーター的な教育をしていくためには、どういった教育環境が必要かという事を教えていただきたい。</p> |
| 廣津留すみれ氏 | <p>私が小中高の時代とまた少し学習環境も変わっているとは思いますが、どういふ教科の授業においても学生さんたちが意見を述べるができる余白っていうのは本当はあるはずで、私が習っていた時はこうなんですよ、はいわかりましたって言って吸収して終わっていたところを、例えば、社会科の授業ですとか、本当に先生がいかにその場をファシリテートして、その生徒が思っていることを言っているんだなと思わせるか、そこをどうやって変えられるかなというところが私の中では一番なんじゃないかなと思います。</p> <p>そこをまず土台として変えていかないと、新しい考えを思いつこうっていうモチベーションにもならないし、周りが認めてくれないんだったらそれもなかなか自分の中から発言することもできないし、大人たちが率先することでだんだん学生の中に浸透してあげていいんだなっていうものを何か別に議論の授業にしましょうとかじゃなくて、例えば英語の授業でもそうですし、言いやすい雰囲気先生から教室に持っていくことができる、とまずは土台が変わっていくんじゃないかなと思っています。</p> |
| 平井委員 | <p>今日の講演や本を読んで何点か記憶に残ったのは、ハーバード大学の1年生の食堂ですね、あのシステムすごいなっていうのはさすがアメリカと思いました。</p> <p>もう1点がハーバード大学の2年生の時だと思うんですけど、雪で滑って尾てい骨を座れないほど傷めてしまって、留学先で病気やけがをしたら相当精神的にやれたんじゃないかなというのをつくづく思いました。</p> <p>ぜひ先生方もこれを読まれたらいいんじゃないかと。日本の英語を教育のことにも触れていて、先生が一方的にしゃべって生徒は受け身ではとてもじゃないけどアメリカで通用しないと。アメリカだと質問しないと自分の存在がなくて</p> |

| | |
|----------------|--|
| | <p>なってしまうということで、さきほどの食堂もそうですけども、全く知らない学生に声をかけてとにかく友達になると、語学を磨くために死に物狂いやられたんじゃないかなと思うので、本当にすごいなと思いました。</p> <p>私の個人的な考えですけど、私子供が4人いて海外に留学していました。海運業を営んでいるので当然契約書も英語だし、メールも全部英語で入ってくるので、私は読み書きができますがしゃべれないですけど、そういう意味でたまたま海外行く機会があったんで、子供も語学に興味を持って留学したいというのが本人たちから言ってきたんですよ。</p> <p>どんどん海外留学させるチャンスを作ってあげる、逆に留学生を佐伯市内に受け入れるのがいいんじゃないかなと思うんですよ。</p> <p>学校の先生も市役所の職員も凝り固まった考えがあるので、海外に出て学んでくるというか、そうしないといつまでたっても考え方は変わらないと思うんで、それは大いにやるべきじゃないかというのが私の持論ですけど、何かご意見がありましたらよろしくお願いします。</p> |
| <p>廣津留すみれ氏</p> | <p>苦労はしたんですけども、高校3年生の時は本当に大変過ぎてあまり記憶にないんですけども、留学に行くきっかけというのはおそらくいろいろなところにはあると思うんですけども、私が大分から留学に行こうと思ったのも、例えばアメリカに行って現地を見なかったらそういうきっかけもなかったかもしれないと思います。</p> <p>今やっているサマーインジャパンという取り組みも、そういう何かのきっかけになればというのも理由の一つとしてあったんですけども、周りの大人が先に変わらないというのも大いにありまして、大学生を見ていると本当にオープンマインドになってきていて、LGBTQの人が普通に大学生の同級生にいて普通だし、どういう性別とか国籍とかの人がいても全く抵抗なく入ってくるし、日本の大学の同級生と比べると全然考え方も違って、そういう小中高校生が出てきた時に、大人や先生方がどういうリアクションをするのかっていうのは大事なことだと思います。</p> <p>本当に先に大人から変わっていく、自分の常識を常に疑ってかかっていたことが大人のファーストステップなのかなと思います。</p> |
| <p>久々宮教育部長</p> | <p>今日はご講演ありがとうございます。</p> <p>教育委員会ですので対象は義務教育という事で中学生と小学校になるんですけども、廣津留さんが公立小中学校出身ということで、田舎の子供にとっても夢があると思うんですけども、基本的には田舎の子供も都会の子供も多少教育環境が違って時間だけは平等と思っていますので、先ほどタイムマネジメント術ということで、時間の効率的な使い方があったんですけども、廣津留さんは小さい頃からお母様にいわゆる to do リストを作るように言われて、優先順位を決めながら取り組んできたというふうなことを聞いたんですけども、その辺の具体的なタイムマネジメント術で、佐伯の小中学生にアドバイスがあれば具体的にお願いしたいなというふうに思っています。</p> |

| | |
|---------------------|---|
| <p>廣津留す みれ氏</p> | <p>時間の使い方に関してはですね、明日学校に必要なもののリストを小学生の時に書いていたのが始まりで、今でも実際に to do リスト使っているんですけど、それはその日のタスクを書くようにしているんですけど、いつも学生さんに聞かれた時によく話すこともあるんですが、私の本の副題にも5分の使い方で世界が変わるとあるんですが、大きな目標があるとしても、例えば、2年後にハーバード大学に受かるとか、3年後にエベレストに登るとか、どんな目標でもとにかく細分化して今日何をしなきゃいけないかっていうのをちゃんと洗い出すことがまず必要だと思うんですね。</p> <p>中学校の定期テストも準備カレンダーをもらったから、とにかくそこまで何ページやらなきゃいけないって、何日あるからそれで日数で割って今日やる分はこの単元を4ページとかを書くようにはしていました。</p> <p>そういうふうにならなくていいことになって意外とハーバード大学に入らなくて思ったらありえない目標に思えても、今日やることを分解したら今日は英語の単語を50個覚えてエッセイをちょっと進めてとかっていうやれる分量になるので、それをいかに目に見える形にして to do リストにするかで結構目標の達成率が変わると思っていて、どんな目標も絶対無理だよっていうんじゃないんで、例えば、それが半年後や3ヶ月後までには何をしていたらいいのかを書き出して、3ヶ月後、1ヶ月後で今週何したらいいかを書いたりすると、10分ぐらいあれば今日は何をやったらいいいかっていうのが大体出てくるので、10分なんてインスタグラムで動画見ていたらすぐ経つ時間なので、それを毎朝か夜とかにつけるようにするだけで、目標の叶え方というか達成率変わると思うのでぜひ実践してもらえたらなという気持ちはあります。</p> |
| <p>小寺委員</p> | <p>今日はとても貴重なお話ありがとうございます。</p> <p>私も今の話の流れで、大人が変わるっていうところ、私も三児の母でして子育てを振り返って、子供の変容とか成長に合わせた教育を1母親として地域の教育に携わらせていただいています。</p> <p>地域としてできること、教室の中でこれから続けていくことと変わっていきること、子供にとっての教育を日々考えるんですけども、これからグローバルに生きていける子供というところで、いろいろな話の文脈で共感するところが多いんですけども、公立の学校での英語教育をこれからどうやっていけるかという、ALTの先生の働き方というところも県や市も変わっていくといいなと。</p> <p>仕事を増やす意味ではないんですけど、生徒がそういったネイティブの発音に触れられるような機会は増えていくといいなと思いました。それと、子どもが自発的に学校や社会教育施設などの地域のものを使って何かやっていけるような先行事例とか、もしありましたら教えていただきたいと思いました。</p> |
| <p>廣津留す みれ氏</p> | <p>英語を自然に触れられるような機会を作る場っていいことですかね。</p> <p>例えば暗唱大会とか私のときもありましたけど、すごくモチベーションになると思うんです。スクリプト見ないで英語でしゃべるとハードル高いと思うんですよ。</p> |

私がすごくいいなと思うのは、当時、もう今は多分違うと思うんですけど、何かこう英語を上手く日発言できる人って何かちょっと恥ずかしいからあまり人前でちゃんとうまくしゃべるのってどうかとか、そういう抵抗もあったのが今ではもう全然全くそんなことなく、特に高校の現場とか、サマーインジヤパンで小中高生の英語を見ていると、堂々とした姿っていうのがこの10年続けてきて変わったなっていうのが感覚としてあります。

これは例えば大分市で中高生の方と実際にワークショップをやったときも、始めた頃2013年頃と比べると、大分は土地柄APUの先生がいらっしやったりとか、周りに英語をしゃべる方がいらっしやるので、それに抵抗がなくなってきたっていうのもあります。

あと次の世代がどんどんそうやって新しいオープンマインドになっていってっていうのもあると思うんですけど、まず教室内で先生全員にそのネイティブな発音にして欲しいとかっていうのはなかなか難しいと思うんですけど、この前も教科書選定をしたところ、全部に二次元コードがついていて、ネイティブの発音とかビデオとかで出てくるようになっていたりとかっていうのは本当素晴らしいなと思うんですけど、今二次元コードがすべての教科書について、書写も持ち方の動画も見られるし、家庭科もりんごの剥き方も見られるし、全部が情報にアクセスできるようになると、逆にそれを取捨選択するのかがあってというのが学生に判断が任される部分も増えてきていると思います。

それが例えば、英語などしっかりした発音というのはその教室にないからすごく大事だと思うんですけど、例えばすごく優等生タイプの方だったら、全部これ二次元コード見て全部教科書も読まなきゃって思ったりすると、もうすごい膨大な学習量になってしまうと思うのでそこをちゃんと先生方がリードしていただく。

例えばリンゴの剥き方だったら動画見なくてもそこに先生がいらっしやるけど、ネイティブの発音がないとか、そういうところをうまく補強してIT化とか、教材を使ってデジタル教科書とかを使ってやれるようになったら、その教材の中に先生方が選んだ例えば私がよく大学で使うのは、例えばテーラー・スワフトとかみんな知っているような歌手がニューヨーク大学でスピーチをしている動画とかもあるんですけど、そういうのを見ると彼女の自分の苦悩とかいかにそれを乗り越えたかとかのストーリーがあるので、英語の教材と思って勉強するというよりも自然に入ってくるとか。

あと先ほども新聞の欄に載っていたよってお話をされていたと思うんですけど、そういうのを例えば授業に組み込んで、今ガザでこういう問題が起きていますっていうのを英語で学ぶとか英語を学ぶというよりも、英語というツールがあればこれだけ広い世界のことを知れるんだよっていう、ツールという認識をもっと持ってもらえるようなきっかけを授業の中で教材として与えられたりすると、勉強する気になるというか人間は勉強しろというとしたくなくなるものなので、そういうふうになら今実際にリアルタイムで起きている記事とかを出す

| | |
|---------------------|--|
| | <p>と、実際にこれってあの時世界に役に立つんだなという実感も思えて、もっと英語に興味を持てるのではないかなというのは常々思っております</p> |
| <p>宗岡教育 長</p> | <p>昨日のコンサートはありがとうございました。</p> <p>映像でも紹介ありましたが、食堂の風景だとか寮決めだとか、ハリー・ポッターを見ていると実際こうなのかというのがびっくりして、だからああいう小説が出てきたんだというのもわかった気がしたんですけど、日本人の奥底にある考え方とか文化とかを考えたときに、個人攻撃、意見を言うと個人攻撃になってしまいます。</p> <p>そうじゃなくて、建設的な発言、建設的批判っていうのが大事なんだよとか、遠慮せずに本音で語るというところが今後大事になっていくんですけど、私たちが育った時には、あまり余計な事は言うなという文化の中で育ってきて、それがもう当然通用しないっていうことはわかるんですけど、それで育ってきた先生方が文部科学省の方でもアクティブラーニングの授業を目指しなさいということで最近やっていますが、どうしてもそういう日本人的な考え方から教師も抜けきれない。</p> <p>今の子供たちに外国のそういう考え方とかにたくさん触れて、考え方を変えていくことを経験させる必要があるなというふうに思っているんで、先ほど小寺委員からALTの話が出て、ALT自体が外国で子供の時からどういう学習環境で育ってきて、どういう考え方を外国の人は持っているんだよというようなことを、子供たちにALTは英語の授業の補助に入るんじゃなくて、何かそういう語りかけを子供たちにできないかな、そういう触れ合いができないかなとか、遠隔授業で外国の人と触れ合って交流ができないかっていうような、そういうところも目指しながら、全員の子供が留学できるわけじゃないし、全員の子供が外国人と触れ合えるわけじゃないので、そこも目指しながらやっていきたいなと思います。</p> <p>廣津留さんが外国に行った時に、そういう多様な考え方とか外国人の方の物の考え方とかに触れたときに、日本ではこういうところを変えていけばもっと子供たちが早くから外国の文化に触れられたのにと、そういうところのお考えを紹介していただきたいと思います。</p> |
| <p>廣津留す みれ氏</p> | <p>ALTの話はその通りです。英語の成績が良くなるだけでは全く何も変わらないので、コンセプトのところからどういう考え方で英語を使うのかとか、英語を話す言語で結構話し方とかコンセプトも変わりますので、考え方とかをシェアしてもらってというのはすごくいい方法なんじゃないかなと思います。</p> <p>日本人の考え方的に言われた通りにこうやりなさいと言われたら、あまり余計なことは言えないというのもその通りだと思うし、それが特に悪いことっていうわけじゃなくて、それはもう独自のカルチャーなので、それを根底から覆しましよっていうのは無理な話で、逆に言うと、こうしましよって言ったら日本人は大体やるじゃないですか、先ほどの例えば、この意見交換をオープンした時に、市長や皆さんに意見を言っていたらっていうふうオープンに</p> |

| | |
|----------------------|--|
| | <p>していただいたように、日本全体は確かにそうだけど、例えばこの今の空間ですと、皆さんもともと発言されていると思うんですけども、意見交換をしましょうと言えば、この空間だけでもオープンに意見交換できる環境ができていますよね。</p> <p>それを例えば教室に持って行きたいし、その教室でもし先生が苦手なのだったら、例えばその学校の校長先生が全体の会議があった時に全員が意見を出せる場を学校で作ることによって、先生方もこういう場でもちゃんと意見を言っているんだなっていうことを理解したりとか、思った事をそのまま言っているんだなっていう実感する機会をいろいろな場で小規模で行うことができればいいんじゃないかなと思います。</p> <p>そういう環境にいることが普通だと思うようになれば、生徒にもそういう環境を作ってあげることができると思いますし、その場をファシリテートする人が重要になっていると思うので、そこをファシリテートする人がこれが絶対だっている人だったら、なかなか新しい意見出てこなくなってしまうので、それを小さい単位で変えていくことができれば先生方も会議の時に重鎮の先生だけじゃなくて、若い人の意見はどうですかと振るとかいうことはおそらくどの現場でもできると思うので、そういうふうにして教育を変えるっていうと大変なことですけども、会議から変えていくとかっていうふうにしたら、だんだんと空気が徐々に変わっていくのではないかなと思います。</p> |
| <p>植田総合 政策部長</p> | <p>昨日のコンサートに続きまして、今日の講演ありがとうございます。</p> <p>グローバルな人材を育成して世界に羽ばたいてもらうっていうのは非常にうれしいことで喜ばしいことなんですけれども、一方で、1度旅立ってしまったら、なかなか遠い存在になってしまうのかなっていうのが現実かなと少し感じております。</p> <p>佐伯市も人口減少で少子高齢化というような状況ですので、できれば将来的に地元に戻ってきて見つけたものを提供していただきたいなというのが思いでございます。そこで廣津留さんのように地元に戻ってこられるきっかけや、何か思いがございましたら是非お聞かせください。</p> |
| <p>廣津留す みれ氏</p> | <p>私は大分市の教育委員のお話をいただいたのが、大体2年前くらい前なんですけれども、もともと大学1年生が終わった夏休みから、サマーキャンプを始めたこともあって、毎年夏休みと冬休みは必ず大分に帰ってきていて、毎年サマーキャンプを通じて、今は大分市と国東市でワークショップや2週間のセミナーをやっているのがいつものスタイルです。</p> <p>そうしていると、自分があまり情報がない段階でアメリカに行ったときに、もっとこうだったらよかったなっていう課題がどんどん出てきて、もっとこういう機会を与えたものがあつたらいいなっていうのはどんどん思いついてくるので、もちろん外にずっといるのもいいんですけども、こうやってそれを実際に還元するっていうのはちょっとおこがましい言い方ですけど、何か自分ができること、今日本当にできることを考えたときに、日本にせっかくいるので</p> |

| | |
|------|---|
| | <p>あれば大分で何かしたいなっていう思いがあったのも一つです。</p> <p>ふるさどがあって本当によかったなと思うのは、昨日のようなコンサートの時に本当に実感するんですけども、周りでも音楽家をやっていて東京出身の人は東京がふるさとなので、なかなかそのふるさとに帰って演奏するとかってあまりなくて、私は大分に帰って昨日のようなコンサートをする、お客さんの中でも知っている顔があったりとか、サイン会に行くとみんな大分弁でしゃべっていて、すごく落ち着いたりだとかっていうことがあります。</p> <p>帰ってき来る場所があることって特に海外に行くと、皆さんアイデンティティがバラバラな人達がたくさんいて、私は18年間大分で過ごしたので、大分に帰りたいなっていう気持ちがあるんですけど、大分での経験というか、友達とかもすごく仲良くやっていたし、そのときの経験がすごく良い環境だったので戻ってきたいなと思います。</p> <p>大学の友達とか見ていると、例えば、お母さんとお父さんの国が違っておばあちゃんとか言葉が通じないという話を聞いていると、私はお母さんも、おばあちゃんも、おじいちゃんも日本人なんて思うんですけど、自分の場合は高校まで大分にいたことによって、大分県人であるというアイデンティティがしっかりしていたこともあって、何か戻ってきたいなという魅力になったので、海外に出る前にどのような経験をしていたかというのと、帰ってきたときにそれを海外の機会よりもよい受け皿があるかどうかというところも大事だと思います。</p> <p>内閣の教育未来創造会議の会議をやっていた時に、議題は留学生をいかにたくさん出すかというのと、いかに外からの人材を受け入れるかという話をかなり議論したんですけども、国内にいる留学生に話を聞くと、日本型のまだジョブ型になりきれていない会社にもあまり成長を感じないとか、日本で会社に勤めても長期的に会社にいるという機会があまりないという話はすごくあって、海外の会社と比べた時に本当に日本に帰ってこの待遇や労働時間とすべてひっくりかえした時に、これがいいのかって比べると思うんですよ。</p> <p>そこで佐伯に帰るのなら佐伯の良さはどこなのかとか比べた時に、ここが良いから佐伯に帰ってきたいっていう理由になるような受け皿を整備する。地域ごとに良さをしっかり作っておくことかなと個人的に思いますけど、難しい課題だと思います。</p> |
| 藤崎委員 | <p>未来が開けるような、可能性が広がるような講演をしていただいてありがとうございました。</p> <p>今日は先生方もたくさんいらっやっているとしますので、次代を担うグローバル人材の育成って、よくどこでも論じられるテーマだと思うんですが、そのときに、例えば、廣津留さんのようにハーバード大学を卒業されて世界中のリーダーの人たちとお友達になりながら起業したり、演奏家としてもトップな人たちを少しでも1人でもですね、佐伯からでもいいんだけど、日本から輩出できるような教育をするのかということの一つあると思うんですけど</p> |

| | |
|----------------|---|
| | <p>も、ハーバードに入れなかった人、例えば40人いたら1人行ったとして、39人をどういうふうグローバルな人材にしていくのかっていうことも現場の先生方には求められるのかなと思ひまして、私も大学の教員を長くしていましたので、本当に難しいと思うんですね。</p> <p>どの辺に焦点を絞って、このテーマについて論じるかってことで大分話が違ってくるのかなあと思ひながらお聞きしていました。その辺についてどういうことをイメージしながらお話になられたか教えていただけたらと思ひます。</p> |
| <p>廣津留すみれ氏</p> | <p>グローバルっていう言葉がすごく曖昧で広すぎるってお話をしたのはまさにその通りで、内閣の会議でもグローバル人材の育成っていう言葉が余りにもその中に出てき過ぎて、現場の皆さんにグローバルっていう言葉はあまり使わないようにという話をしたんですけども、逆にもっと具体的な言葉でグローバル表現しないと皆さんどこを目指していいかわからないっていうところがあって。</p> <p>そういう思いでお伝えしたんですけども、グローバル人材のイメージって、どうしてもいろんな世界いろんな国にスーツケース持って行きますっていうイメージを持たれた人も多いと思うんですけども、私の場合だと、たまたまその学校が海外だったからいろいろな友達ができたっていう話があったんですけども、私の大学の生徒でもポケモンのチャンピオンシップで世界大会に行つて、そこでアメリカにわざわざ渡つて、優勝できなかったけど8位でしたっていう学生さんがいたりするんですけど、もうそれって私にとってはグローバル人材ですし、それは特に国内でだけでとどめていなくて世界でかなうような力を自分の中に付ける。</p> <p>自分の得意分野をここが自分の強みだなというのを世界のレベルを視野に入れながら自分の中で育てられるとか、それが世界の基準で比べ自分を腕試しができるような人がもっと出てきて欲しいなつて思っています。</p> <p>サマーインジャパンのセミナーをやっている時も、英語をツールとして使うことができる学生は増えたので、ここからのステップっていうのは、ハーバード生から例えば、いろんな国でこういうプロジェクトをやっていますっていうのを聞いたときに、もしかしたら自分も例えば気候変動をこれからそのアクション起こしていくにあつて、もしかしたら自分にはこういうことならできるとか、今世界ではこういうことがまだされていないから、自分でもこういう企業であつたり自分で団体を作るであつたりができるかもしれないっていうのを、時事問題とかをちゃんと考えながら、自分の中で見つけられるような人がもっと出て欲しいなつていう思いが一番私の中では強いです。</p> |
| <p>山口委員</p> | <p>教育にかかる費用の話なんですけど、日本のGDPに関わる教育費は先進国では最低と言われているんですね。</p> <p>財政が硬直化して社会保障費にどんどん回してしているんで、教育費を上げていくのは非常に社会風潮で厳しいかと思ひます。</p> <p>ハーバード大学は非常に寄附金が多く、アメリカという国は小さな行政を目</p> |

| | |
|----------------|---|
| | <p>指しているのです、おそらく日本の大学に出している国費の割合も非常に低いと思うんですよね。</p> <p>今、日本の大学もいわゆる稼ぐ大学を目指していますよね。稼いでいけば教育のシステムもいろんな形で広げられていけるという、アメリカは寄付金だとか様々な稼ぐ大学っていう形のシステムが確立されていると思うんですよね。</p> <p>わかる範囲でどういうふうな形で、アメリカはそういった予算とかそういった歳入の捻出をされているのかなっていう部分を教えてください。</p> |
| <p>廣津留すみれ氏</p> | <p>細かいことは私からはお話できないんですけども、ハーバードの場合はなぜ寄付金が本当に多いかというのは、卒業生のコミュニティが一番大きくて、私も卒業した次の日に寄付してくださいっていうメールが来たんですけども、私が卒業するまでにもらった奨学金を考えるとものすごい額をもらっていて、というのはまず、授業料も年間いくらと決まっているんですけど、大体親の年収の何%でいいですよっていうのが決まっているので、膨大なお金を払うことはまずないですし、満額払うのは代々ハーバードに行っていますとか、裕福な家庭の方なので、そうでない限りは奨学金でその人の家庭の事情に合わせて奨学金が出るようになっています。</p> <p>例えば私が夏休みにサマーインジャパンがあるのでハーバードから大分まで帰りますって言ったら、その航空券も大学が補助金で出してくれるんですよ。アメリカの大学に入学したから学費高かったでしょって言われるんですけど、多分日本の私立大学に入ってマンション借りてとか考えると、どちらかというところハーバードの方が安く済んだんじゃないかなと思っているんです。</p> <p>そういう経験を在学中にしているので4年間相当お世話になったなっていう気持ちがあるので、卒業生のコミュニティの中で、これは何かの形で返さないっていうのがすごく根付いています。</p> <p>寄付もすごく上手にできていて、一番の寄付先は学生に直接行く奨学金なんです。</p> <p>寄付者と会う夕食会があるんですけど、卒業生の方に直接お礼を言って、今こういう活動しているんですけどか話をする機会もありますし、みんなでお礼の手紙を書く会もあったり、エンドユーザーの顔が見えている寄付のシステムが確立しているので、確かにこれだったら私も何十年後かに稼いだら寄付して次の世代に貢献したいって思うんです。</p> <p>自分がどれくらいお世話になったかというのと、学校側も卒業生の気持ちになって、これがどういう人がどういう活動をするのに役に立っているのかというのが見えたらいいなっていうのはかなり考えられていると思うので、そのシステム作りが上手だなというのはありますね。あとはこの寄付金の運用をやっていたりしますが、それは上手に行ったり行かなかったりだと思うので、それは学校次第かなと思います。</p> |
| <p>市長</p> | <p>総合教育の会議で廣津留さんという、音楽という感性の能力と同時に、努力されて獲得された脳の部分と感性の部分のバランスのいい本当にそういう素</p> |

晴らしい講師をお招きして、様々な質問或いはまたご意見も頂戴した。

本当の意味でのグローバル人材の育成というのは非常に難しい。とはいえ、生きる力生きる手段だけじゃなくて、本質的に人間が質の向上を図っていくという人間本来の向上心というか、未来志向の歩みを教育の中でもやっていかないと、ただ大学に入るとか職業につくとか、そういう建前の世界のもので評価するものではなく、人間の深みとか歴史を感じる或いはまた文化を感じる、品格のある人をどうやって作っていくかということが、我々の目指すグローバル人材の育成じゃないかというふうに感じている。

そういう意味で子供たちに対して、GIGA スクールというコンピューター教育を始めたが、本質的にはシステム教育というか、プログラミングでソフトができるとどうしてこういう世界なのかという疑問を開ける、発言できる、そういう子供を作っていくということが、これから大きな課題であるというふうに考えている。

今日こういった会議を通して、色々な世界の話聞かせていただく機会を設けてくれたことに心から感謝申し上げたい。廣津留さんのこれからご活躍を祈念して締め言葉とします。今日はどうもありがとうございました。

15時50分終了